

鈴

東部伊勢崎線で伊勢崎駅に着いたのは午後1時近くであった。八月のお盆に合わせ夏期休暇をとり故郷に帰る。ここ数年の私の行動パターンである。

私は現在62歳。東京の出版社に嘱託として勤務している。大学卒業後38年間勤務した出版社を一昨年定年退職した私は、再雇用制度を利用しそのまま本社にとどまっている。編集長までやった人間が総務部で嘱託なんて、と陰口をたたかれながら。

私は現在独身。二年前、定年を機に妻と離婚した。離婚は妻からの長年にわたる要請であり、また有無を言わせぬ通告でもあった。私は定年退職の日帰宅し離婚届に判を押した。子供は娘が一人いるが、既に独立し、今はピアニストとして離婚した妻とともにパリに在住している。

私は現在京橋に住んでいる。妻と娘と三人で暮らした成城のマンションは、独りで住むには広すぎた。離婚後直ちに売却し、その金は妻に渡し、会社への徒歩通勤も可能な京橋にワンルームマンションを借りた。

伊勢崎駅南口を出てロータリーに隣接しているコンビニの前までくると、私はタバコに火をつけた。

暑い。非常に暑い。まさに酷暑だ。コンビニでパンと缶コーヒーでも買って昼食を取るつもりであったが、この暑さでは食欲も湧かない。私は一服しコンビニに設置されてある灰皿にタバコを投げ込むと、とりあえず実家へと向かった。同友会かア、と呟きながら。

明日の夜、午後6時から伊勢崎市内のホテルで中学の同窓会が開かれる予定である。

私が卒業した中学の同窓会は、夏期オリンピックに合わせ開催することが慣例となっている。4年に一度である。それは幹事の負担を考えてのことだが、小規模な同窓会は毎年気の合った仲間同士でお盆前後に開いている。地元の同窓生がほとんどであるが、お盆に帰省する何人かがこれに加わる。私もその一人である。我々はこれを「同友会」と呼んで正規の同窓会とは区別している。もっとも幹事は同窓会と全く同じであるが。

私は駅前の通りを南に下り信号を西に折れた。暫く歩くと小学校が見えてきた。私が通った小学校だ。既に校舎は建て替えられていたが、それでも校庭の片隅に当時の面影が偲ばれた。私は歩を止め校庭を見つめ暫し黙考した。

何処からか鈴の音が聞こえた。…風鈴？

「あら、宏、お久しぶり」

振り向くと、縹地を染め上げた涼やかな着物姿の女性が、日傘を傾け笑みを浮かべていた。クラシカルアップにした黒髪が古都の情趣を思わせる。手には数珠を提げていた。

「あたしよ、ハ・ル・カ」

柔らかな優しい声だ。

「何だ、晴香か、びっくりしたァ」

「何だ、晴香か、びっくりしたはないでしょう。幼馴染みに向かって」

「着物なんて着てるから誰かと思ったよ。いったい何処へ行くの、数珠なんか提げて」

「ちょっとね。…それはそうと明日の同友会、宏、行くの？」

「もちろん。晴香も行くよね？」

「…そうねエ…」

晴香は曖昧に呟いた。少し迷っている素振りを見せた。

鈴木晴香。私の幼馴染み。幼い頃家が近かったのでよく一緒に遊んだ。お互いの家を往き来し、縄跳びやカルタ、時には釣りにも行った。目の前の小学校ではブランコ、鉄棒、ジャングルジム、滑り台等々授業が終わってから日が暮れるまでよく一緒に遊んだ。夏休みには小学校の裏手にあったプールにもよく二人で行った。濡れたボブカットと日に焼けた幼女の笑顔が私の脳裏に焼き付いている。

お互い近況等報告しあったあと、「では、また」と言って彼女は、東の方角へと歩き出した。彼女は一度振り返り手を上げた。

「必ず来いよ！」と叫んで、私も手を上げ彼女を見送った。気のせいか彼女の後ろ姿は、夏の日差しに溶け込むように透けて見えた。

私は西の方角へと歩を進め、橋を渡り、坂を下り、信号を渡って母が独りで暮らす家の前まで来た。

私の実家は、20年前、区画整理により移転を余儀なくされた。その補償金と父の退職金で建てた家は、洋風の二階建てである。玄関先でチャイムを押したが反応がない。だが玄関ドアは鍵が掛かっていなかった。私はドアを開け恐る恐る家の中に入った。

廊下を進むと、リビングルームからショパンのピアノ協奏曲第一番が聴こえてきた。母の好きな曲だ。リビングルームに入ると、母は長椅子に腰掛けショパンに聴き入っていた。私が声を掛けると「あら、ごめんなさい。気が付かなかった」と言って立ち上がり、CDを止めた。

「礼子さん、玄関のドア、鍵掛かってなかったよ」

「あら、そう、本当？ 鍵掛けたつもりだったのに。…最近物忘れが酷くなっちゃって」

「礼子さん、それなら一度医者に診てもらえよ。物騒じゃないか」

「ごめんなさい。お昼は？ 食べた？」

「いや、まだだ」

「あら、たいへん。すぐ作るわね」

母はあわててリビングルームからダイニングルームへと移動した。

「ゆっくりで良いから」と私は声を掛け、自分の手荷物を二階の客間へ運んだ。

母は実母ではない。実母は私が3歳のとき交通事故で死んだ。私には兄弟姉妹はない。私はたった一人の孫として同居していた祖父母に育てられた。だが中学に入って間もなく祖父が死に、高校に入って間もなく祖母が死んだ。

祖母の一周忌が済むと、父は見知らぬ若い女性を家に連れてきた。そして「宏の新しいお母さんだ」と言った。

私にはほとんど実母の記憶がない。仏壇の上に飾ってある実母の遺影を見ても、これが母である、母であったという実感はない。実母に対する思慕はなかった。

しかしながら、私と10歳しか年の離れていない若い女性を「お母さん」と呼ぶことに

は、些か抵抗があった。継母について作文等で「母・お母さん」と書くこと、継母のいないところで「母・お母さん」と呼ぶことにはさほどためらいはなかったが、継母の面前で「お母さん」と呼ぶことには少なからずためらいがあった。

私は継母のことを面前では「礼子（レイコ）さん」と名前で呼んだ。父はそれを苦々しく感じたに違いないが、継母はそれを仕方のないことだと受け止めたようだ。継母は私が「礼子さん」と呼ぶことについて何も言わなかった。私は今でも継母のことを「礼子さん」と呼んでいる。

父と継母との間には子供が出来なかった。それが二人の意図した結果かどうかは分からないが。

「宏さ~ん、お昼よォ~」

階下で母の呼ぶ声がした。

昼食の料理はサラダとカレーピラフであった。母は料理が得意である。でも今日のカレーピラフは、少し味が薄いような気がした。

母は、昼食は既にあり合わせのもので済ませたと行って、リビングルームで再びショパンを聴き始めた。

私は食事が終わると食器を洗いそれを棚に片付けた。そして父の書斎に行き椅子にもたれた。父は3年前に心筋梗塞で死んだ。高校教師であった父の書棚には、文学書、哲学書、歴史書等々様々な本が収納されている。だが私が読みたいと思うような書物はそこにはなかった。

肩の荷をひとつ降ろして春を行く 過ぎ去りし日々胸に宿して

父の詠んだ歌が小さな額に収められ書棚に飾ってあった。おそらく退職直後に詠んだ歌を、父の死後、母が飾ったものであろう。

過ぎ去りし日々か。きっと色々な出来事があったに違いない。長い教員生活の間には。仕事のこと、実母のこと、継母のこと。そして私との確執等々全て含んだうえでの念を感じる。

私にも色々あった。仕事。妻。そして娘。

私は暫し黙考した。

何処からか鈴の音が聞こえた。……風鈴？

ふと涼やかな着物姿の女性の顔が脳裏に蘇った。晴香。彼女との過ぎ去りし日々が走馬灯のように脳裏を過ぎる。幼い頃夏祭りで一緒に神輿を担いだこと、露店で一緒に金魚すくいをしたこと、綿飴を買って一緒に舐めたこと等々。

晴香とは中学も同じであった。しかも奇跡的に三学年とも同じクラスであった。部活も同じテニス部であった。もっとも男子と女子では活動内容が異なり、一緒に練習することはなかったが。

晴香は頭が良かった。中間、期末、その他の試験でも常にトップを維持していた。彼女

は美人で学力が高く運動神経も抜群だった。まさに「才女」であった。それに比べ私は容姿も成績も運動も全て平均以下。加えて酷い吃音であった。吃音に起因する苛めにもあっていた。

何故晴香は宏を選んだのか？ 何故美人は吃音を好むのか？ Oh My God！
我が学年の七不思議！

同学年の仲間はそのように二人を揶揄したが、揶揄されるたびに晴香が躍り出て仲間の前で決然と抗議した。時には華麗なる回し蹴りも披露して。やがて二人の関係は理の当然となった。

中学3年になると、私は晴香に勉強を教えてもらうようになった。主に苦手な数学を中心に。晴香は学校が終わるとそのまま私の家に上がり込み数学のレクチャーをした。私は同年齢、同中学、同学年のカリスマ家庭教師を得た。

「あたし、将来、学校の先生になる。絶対になる。それが夢。…宏は？」

「しよ、しよ、将来の夢なんてねえよ。ま、ま、まだ考えてねえ。…で、で、でも、なるとしたらサラリーマンかなア、た、た、たぶん、普通の…」

「まったく、もう。…そんなんつまんないよオ～」

「お、お、おおきな世話だ」

晴香の中学3年時の紺の制服のスカートは、尻の部分が椅子との摩擦でテカテカだった。おそらく同学年の他の女子生徒のスカートも同様であったと思う。男子生徒の黒の制服の尻の部分もテカテカしていたと思う。だが私には晴香の尻の光ったスカートのみが印象に残っている。

私はカリスマ家庭教師のおかげで県内トップ校と言われるM高校にからくも受かった。晴香は当然のことながら名門M女子高校に難なく合格した。私たちは、私の部屋で、コーラで祝杯を挙げた。そして私はそのとき初めて晴香の唇に触れた。

しかしながら、高校に入学してからは、晴香と親しく付き合う機会は徐々に失われていった。何か二人の間にあったというわけではない。たった一度のキス以降何もなかった。若さ故の行動心理。互いに互いを意識し過ぎたのかもしれない。成長過程の男と女として。

やがて二人の関係は駅で会うと挨拶を交わす程度となり、高校3年時にはそれさえ交わさなくなった。あれほど甘やかなくちづけを交わしたというのに。

晴香の高校3年時の制服のスカートも、中学3年時と同様、尻の部分がテカテカしていた。私の記憶の底では、駅を出て女子校に向かう晴香の後ろ姿が、あのテカテカのスカートが今も光を放っている。

晴香は、その後、G大学教育学部へと進み、中学校の教師となった。結婚はしなかった。独身を貫き、現在は囑託として市内の小学校の教壇に立っている。晴香とはこれまで何度も同窓会で顔を合わせている。その折に晴香本人が私に直接語ってくれた話だ。私は晴香に私の吃音が高校入学以降徐々に治ったことを話した。その話をすると晴香は、「それは私が魔法のキスをしてあげたから」と言って笑った。

夕飯は卵と海老のチリソース煮がメインの中華料理であった。中華料理は最も母が得意とする料理である。だがこれもやや味が薄いような気がした。以前はもっと私の五感に響くような味付けであったのに。

翌朝、私は朝食後庭の芝刈りをした。それが終わると母の車を借り郊外のホームセンターへ行き、網戸の網を購入した。芝刈りをしているとき、網戸の一部が破損していることに気付いたからだ。

「いつ破れたの、網戸？」

私は母に訊ねたが、母は首を傾げて「知らない」と言うだけであった。

母の車にも小さな擦り傷が何カ所かあった。おそらく訊ねても「気付かなかった」と言うだけであろう。白いアウディA4のセダン。車好きの母が大切に乘っていたはずなのに。

私は、ホームセンターから家に戻る途中、晴香の家の前で車を止めた。別に用があったわけではない。久しぶりに晴香が住む家を見てみたくなったのだ。晴香の家も区画整理を機に建て替えられている。本州瓦を載せた重厚な和風住宅が車のガラス越しに見えた。それほど広くはないが庭にも金を掛けた様子が窺えた。だが、私は、あれッ、と思つて車を降りた。違和感を覚えたからだ。晴香の家には人が住んでいるという気配がなかった。庭も少し荒れていた。私は「おかしいなァ」と独りごちた。

何処からか鈴の音が聴こえた。風鈴？ 確認すると、晴香の家の軒先で風鈴が風に煽られていた。

午後5時30分、市内のホテルに着いた。早過ぎるかな、と思つたが、既に多くの同窓生の姿がロビーに見えた。何人かの女性の姿もあった。私は晴香の姿を探した。晴香はまだ来ていないようだった。

同窓会兼同友会会長の沢木が「やあ」と言つて近づいてきた。背丈はそれほどでもないが、恰幅の良い好人物だ。去年より白髪が増している。彼は「話がある」と言つて私をロビーの隅に誘った。

「…実は、晴香のことだが、彼女、今年6月死んだ」

「えッ！」

「…今夜の同友会は、晴香のお別れの会を兼ねているんだ」

「ちょっと待ってくれ」

「…晴香、授業中に倒れてなァ。病院に搬送された時には既に事切れていたそうさ。くも膜下出血らしい。あつという間に死んだらしい」

「嘘だろう。そんな馬鹿な！」

「…本当だ。葬式も済んでいる。ただ家族葬だったので、俺たち皆、葬儀への出席は遠慮したがな。そこで今回の同友会は、晴香との別れの会にしようとして皆で決めた。晴香には、長い間、同窓会の幹事も引き受けてもらっていたからなァ」

「でも、俺は昨日晴香と」

「彼女は、宏も知つてのとおり一人っ子で、しかも両親は既に亡くなっている。親戚の手で茶毘に付されたそうさ」

「でも、俺は昨日晴香と」

「聞きかじりだが、医者の話では、おそらく何の痛みも感じなかつただろう、とのことだ。それがせめてもの救いだ」

「…沢木、電話では俺に何も…」

「そりゃ言おうと思ったさ。…でも言えなかったよ、特に宏には」

私は一瞬沢木に怒りを覚えた。

「…会場のテーブルには、晴香の写真が並べてある。晴香と仲の良かった敦子が自分のアルバムから剥がして持ってきたんだ、額に入れてな」

私は急に吐き気を感じ口を押さえた。

「司会進行役は高木がやる。別れの挨拶は俺がする。献杯は宏にと思ったが、挨拶に続けて俺がやることにした。…なァ、それで良いだろう？」

私は返事ができなかった。声を上げようにも喉が詰まって声が出なかった。私はその場に呆然と立ち尽くしていた。

「…そろそろ始めるぞ。晴香が待ってる」

沢木が私に声を掛けた。

会場に入ると最前列のテーブルに額に収められた晴香の写真が数点置かれていた。多くの花に埋もれるように。中央の写真はかなり大きく、和装の晴香の上半身が鮮明に写っていた。それは昨日出逢った晴香の姿であった。

「二年前、還暦を記念して二人で写真館へ行ったの。正絹京染小紋。着物姿の晴香、とても素敵でしょう」

敦子が静かに言った。

「これは高校時代の写真」

敦子が左側の写真を指差した。女子校の制服を着た若き日の晴香の姿がそこにあった。尻のテカテカ光ったスカートを翻し颯爽と歩いて行く晴香の後ろ姿が脳裏に浮かんだ。

「…さあ、始まるわ。席に着きましょう」

敦子に促され私は自分の席に着いた。

晴香との別れの会は、会長の沢木の献杯で始まり、出席者各々が晴香との思い出を語り、しめやかに執り行われた。

晴香との別れの会が終わり、二次会へ行こうという沢木の誘いを振り切って、私は独りホテルを出た。タクシーで帰っても良かったが、徒歩で帰った。歩きたかったのだ。帰路の途中で雨が降り出した。それは瞬く間に土砂降りとなって私の全身を強く打った。耳の奥で鈴の音が激しく鳴った。

翌日の夕方、私は母と一緒に寺に行き、墓の前で迎え火を焚き、その火を盆提灯に入れて持ち帰った。お盆の間、私は父の書斎で書棚から日本文学全集を手に取り、なるべく短めの小説を選んで読んだ。母はリビングでクラシック音楽を聴き、キルトを刺縫いした。

お盆中、私が最も驚いたことは、母のCDの中に私の娘が弾いたピアノコンチェルトが含まれていたことだ。それは私が家に帰ってきたとき母が聴いていた「ショパンのピアノ協奏曲第一番」である。二年前パリの劇場で収録されたものだ。もちろん私も同じCDを持っている。京橋のマンションの棚に飾ってある。

…迂闊だった。何度も聴いて、娘のあの情感豊かなピアノ演奏術は私の耳に残っている

はずなのに。

私はCDジャケットのピアニストを指差し「これ、俺の娘、礼子さんの孫」と母に言った。だがあろうことか母は、首を傾げ、「宏さん。娘さん、いたの？」と訊き返した。私は愕然とした。

娘の名はともかくその存在さえ忘れている。昔とはいえ、娘を何度もこの家に連れてきているのに。

一時的な記憶の混乱かもしれない。確かに10年以上娘いや孫とは会ってない。老人にはよくあることだ。もう母も72歳だ。モデル並みの体型は維持しているものの、既に銀髪のおばあちゃんである。

私は母を病院へ連れて行き脳の専門医に診せた。検査結果はすぐには出ない。

私は今月末で出版社を辞め、母とこの家でともに暮らすことを決意した。

戻って来よう伊勢崎に。晴香と過ごしたこの街に。晴香の眠るこの街に。

晴香、俺、結局普通のサラリーマンにしかなれなかったよ。そして普通に定年退職を迎え、今は普通に嘱託として働いている。晴香にはつまらない男に映るだろうね？

「宏にしては、上出来よ」

鈴の音とともに晴香の声が聴こえた。

盆提灯を寺に納めた翌日の朝、私は朝食を済ませると、東京に戻るため手荷物を手早に纏め、駅まで車で送るという母の気遣いを断って家を出た。玄関先まで母が見送りに出てきた。

「すぐ帰って来るから、礼子さん。いや、お母さん」

母にそう告げると私は駅に向かって歩き出した。

私は一度振り返り、目頭を押さえ嗚咽する母に大きく手を振った。

暑い。今日も酷暑になるだろう。

私は小学校の前で立ち止まり白いハンカチーフで額の汗を拭いた。

もう鈴の音は聴こえなかった。